

EXPO2025 大阪・関西万博スイス館における招待講演及びパネルディスカッションの報告

芝池 諭人¹



図1: イベントでの講演の様子([2]の図より転載).

今年大きな話題となったEXPO2025 大阪・関西万博のスイス館にて、私の研究やスイスでの研究生活についてお話しさせていただく機会がありましたので、報告いたします。

万博会場内のスイス館にて、ベルン大学および在大阪スイス領事館の主催で“University of Bern Day at the Swiss Pavilion”というイベントが4月に開催され、講演とパネルディスカッションを行いました(図1)。私は、博士学生時に5ヶ月間と博士取得後にポスドクとして4年4ヶ月間、ベルン大学で研究生活を送ってまいりましたので、その縁もありご招待いただくことになりました。私のめくるめく(?)スイス生活については、ぜひ拙文

「遊星人の海外研究記 その15」をご一読ください[1]。また、このイベントについては、現在私が所属する鹿児島大学天の川銀河研究センターの広報誌でも紹介させていただいていますので、そちらもご覧いただければ幸いです [2]。

さて、このイベントのアイデア自体は、昨年末にベルン大学を訪れた際に、ベルン大学の研究機関 Center for Space and Habitabilityの広報のSophie Krummenacher氏からお話をいただきました。Krummenacher氏には、ベルン在住の日本語話者向けの講演会を一緒に企画したり、在スイス日本国大使館とベルン大学の共催で日本スイス国交160周年の記念講演会を開催していただいたり、これまでも大変お世話になっておりました。スイスパビリオンでベルン

1.鹿児島大学 大学院理工学研究科 天の川銀河研究センター
yuhito.shibaike@sci.kagoshima-u.ac.jp

大学として展示を行うことになっているが、ぜひまた講演会を開いてみてはどうでしょう?と提案いただき、ぜひぜひやりましょう、と快諾したのでした。

しかし、実際に執り行われたイベントは、この時の相談内容とはかなり違う形式となりました。あれよあれよという間に、在大阪スイス領事館のFabbri翼氏、ベルン大学学長のVirginia Richter教授、JAXA/ISAS所長の藤本正樹教授、ベルン大学Audrey Vorburger助教、Insel Group及びベルン大学のMatthias Wilhelm教授、京都大学の谷口忠大教授、そしてオンラインでESAのMarco Sieber宇宙飛行士、という、錚々たる方々が参加することとなり、イベントの規模が大きくなっていました。私なぞが講演して良いのか甚だ不安でしたが、せっかくいただいた機会ですので、覚悟を決めて臨むこととなりました。国家プロジェクト絡みの案件ということもあり、イベントの詳細は二転三転し、Krummenacher氏も大変苦労されていたのを覚えています。私としては、「講演すべき内容さえおおよそ決めていただければ、英語日本語でも対応できます」と伝え、あとは「座して待つ」しかありませんでした。一番驚かされたエピソードは、万博会場内のレストランをイベント参加者用に抑えてあったそうなのですが、急遽私たちのランチはお弁当になった、というものでした。その時間で代わりにJAXAの展示や某モビルスーツを見ることができたので、私としてはそれでよかったのですが(図2)。

さて、そんなこんなで始まったイベントでしたが、結果としては、非常に良いものになったと自負しております。まずFabbri氏とRichter教授からウェルカムトークがあり、その後私が“Unveiling the birth of planets”と題した講演を行いました(図1)。惑星がいかに誕生するのか、日本の「京都モデル」やスイスの「世界初の系外惑星の発見」など、これまでの研究の流れと現在の理解について、最新の数値計算や観測をふんだんに盛り込みつつ、解説しました。皆真剣な表情で聞いてくださり、分野外の皆様にも、惑星形成について興味を持っていただけたかな、と思っております。その後、藤本教授、Vorburger助教、Wilhelm教授、谷口教授、Sieber飛行士から、それぞれのご専門についてのトークがありました。内容は、宇宙探査、医療、そしてAIといった幅広い内容に及び、いずれも非常に興味深いものでした。そして最後には、上記5名になぜか急遽私も加わ



図2: 某MSの前ではしゃぐ私。

り、“Exploring Space, Advancing Human Health: How Space Research, Medicine and AI Shape Our Future”と題したパネルディスカッションを行いました。司会のVorburger助教に壇上から手招きされた時はかなり焦りましたが、ディスカッション中には私にもお話を振っていただき、事なきを得ました。分野の垣根を超えたディスカッションは、「多様でありながら、ひとつ」の理念を謳った大阪・関西万博にふさわしい内容であったと思います。そして、その後のネットワーキング会では、イベントに参加されたさまざまな分野の研究者や企業の方と(スイスワインに舌鼓を打ちながら)お話しする機会があり、これまた大変勉強になりました。

イベントの最後には、スイス館長Manuel Salchi氏直々の解説の元、スイス館を見学させていただきました。ESA主導のRosetta、JUICE、そしてComet Interceptor計画では、ベルン大学により作成された質量分析器が搭載・搭載予定であり、その展示がありました。Rosetta探査機は実際にチュリユモフ・ゲラシメンコ彗星の組成を分析しており、その結果を元に再現した彗星の「匂い」を嗅ぐこともできました。なんとも言い難いちょっと腐ったような匂いで、お世辞にも良い匂

いとは言えませんでした。とても貴重な体験となりました。今後彗星の論文を読むと、この匂いを思い出すことになるのでしょうか。ちなみに、この展示の日本語の説明文は、私が少し添削しました。スイス館に行かれた皆様、「謎日本語」は見つからなかったでしょう？

参考文献

- [1] 芝池諭人, 2024, 遊星人 33, 3.
- [2] 芝池諭人, 2025, 天の川センターニュース No.9, 17.

著者紹介

芝池 諭人



鹿児島大学大学院理工学研究科
天の川銀河研究センター特任助教。
東京工業大学理学院地球惑星科学系博士課程修了。博士(理学)。
ベルン大学ポスドク研究員、国立天文台アルマプロジェクト特

任研究員などを経て、2025年4月より現職。専門は惑星形成論。日本惑星科学会、日本天文学会、日本地球惑星科学連合、Swiss Society for Astrophysics and Astronomyなどに所属。